

ミュンヘン便り

——ミュンヘン大學の現狀——

増田四郎

ミュンヘンに来てもう十日たちました。町の様子も大體わかりましたが、まだまだ表通りのことしか知りません。それでさしあたり今日はミュンヘン大學のあらましについてお便りすることにします。ミュンヘンの町全體がそうですが、この大學もひどい戦災をうけ、目下復興の最中です。大學の中庭や一部の教室は、まだこわれた煉瓦でうまっています。そのかたわら新しい部屋がどしどし造られています。廢墟のような講堂に立派な先學の像がたくさん並んでいるのをみるのは、痛ましい限りです。しかし復興した教室や研究室は、質素で明るく、モダンな感じがします。

理工科関係には、いわゆるテー・ハー（テヒニツシュ・ホツホシュール）が獨立して近所にあるので大學はつぎの七學部し

かありません。學部と現在の全學生數とをしめしますと、つぎのようになります。神學部(三三六名)、法學部(一八四三名)、經濟學部(三一六五名)、醫學部(二〇二三名)、獸醫學部(三二八名)、哲學部(二五二九名)、自然科學部(三三三三名)、總計約一萬二千の學生數となります。そのうちでドイツ人學生は一萬一千五十人、外國人學生は九百五十人です。これだけの學生に對して教授・助教授・講師・助手等大學側スタッフの總數は約一千人に近い數にのぼります。

面白いのは外國人學生の數で、九百五十名の學生は、ドイツ以外のヨーロッパ二十七ヶ國と、ヨーロッパ以外の四十三ヶ國の計七十七ヶ國の留學生から成っています。従つて學生食堂は人種の展覽會場のように、仲々愉快です。それに國際情勢を反映して、食事するテーブルまでちょっとデリケートに自然にきめられてしまします。アメリカ占領下にあつた關係から、アメリカ人が二百人近くいるのはやむを得ませんが、不思議なことに、アメリカ留學生の大部分は哲學部、つまり日本流でいう文學部に籍を置いています。ヨーロッパでたくさん留學生を出している國は、オーストリア、ノールウェー、ギリシャ等で、いずれも五十名以上います。ヨーロッパ以外ではイラン、エジプト、トルコが斷然多く、これらの學生は多くは醫學部に屬しています。日本からは哲學部つまり文學關係で三人、法學で一人、計四名です。先日もギリシャの學生がキプロス問題で食堂にピラをまいて、ちょっと緊張した空氣がみなぎりました。し

かしカトリックの強いバイエルンのことですから、學生の政治的な關心が案外弱いようにみうけられます。しかし、ギリシャ、エジプト等の學生が、自動車に小さい自國の國旗をたてて走っているのをみますと、やはり民族というものの生きた力を感じさせられます。學問のためには國境はありませんが、世界七十七ヶ國の血の氣の多い學生達と食事を共にしていますと、やはりラッセ(民族)ということの深刻な對立をひしひしと考えさせられます。

經濟學部はさらに國民經濟學科、經營經濟學科、林學科の三學科に分けられています。學生數はそれぞれ七七三名、二二九四名、九八名で、經營經濟學つまり日本の商學科が斷然たくさん學生を擁しています。これは戦後におけるドイツの一般的な風潮だそうです。

私が關係している教授達は、法學部の法制史の教授ヘルマン・クラウゼ、經濟學部の經濟史の教授フリードリヒ・リュトゲ、社會學のアルフレッド・フォン・アルティン教授をのぞいてはすべて哲學部の人達です。哲學部は大きく分けて、歴史・哲學・文學・言語學・民族學・自然科學となりますが、ここでは世界中の言語學が開講されており、非常な壯觀を呈しています。しかも言語學に屬する教授の多くは、その國の文化史もやれるような人ばかりです。例えば日本にも知られたビザンチニストのフランツ・デルガー教授は、中世及び近世ギリシャ語の教授であり、ゲルマン古代史のオットー・ヘーフラは北歐言

語學の教授であり、説話文學のハミツチユさんは今學期から日本語の正教授になっています。昨日も宗教哲學のローアーノ・グアルディーニ教授の話を書きました、非常に熱のこもったものでした。歴史學本來の専門家には、近世史の大家フランツ・シュナーベルがおり、中世史にはマックス・シュビンドラー、ヨハネス・スポエール、古代末期・中世初期にはシエンク・フォン・シュタウフェンベルク、中世哲學にはアロイス・デンブ、比較歴史學にはゲオルク・シュタットミュラー、民族學にはヘルマン・パウマン、名譽教授のワルター・ゲッツ等々がいて、まことに多士濟々の感じでした。これらの人々は多かれ少なかれ日本にいる時にその著書や論文を読んだ人々ですので、何となく親しみを感じますが、三十代の若い研究者も次から次へと輩出しており、さすがミュンヘンは西獨文化の中心だと思われまふ。教授の中にはライブチヒヤベルリンから轉じて來た優秀な人も多く、州政府もこの大學の充實に非常に熱心なようです。

しかしここでも一般に専門家は自分の専門領域に安心しきつ

ているような風潮があり、世界思潮のうごきに、日本ほど氣をくばっておりません。その點で日本の學問の方が淺くって苦しく、また廣い視野でなやまなければならぬように思います。こちらで何か質問すると、「それは哲學の問題だ」とか、「それは宗教の問題だ」という風に、にげられてしまいます。その代り、専門知識については、日本と正反對に、まったく身についた腹からの意見を述べてくれます。頭でおぼえただけでなく、からだで知った知識のように思います。

大學は再興の意氣にもえており町には復興の新建築が建てられ、ナチオナル・テアターには一九五八年までには完成の豫定と書いた大きなビラがはってあり、慎重に、しかも勇敢に立ちあがるミュンヘンの雰圍氣は、十年後の壯觀を想わせるのに充分です。私はこれから約三ヶ月間、心のこりなくこのバイエルンの首都の學問的空氣にひたりたいと思っています。(五月二十日ミュンヘンにて)

(一橋大學教授)